

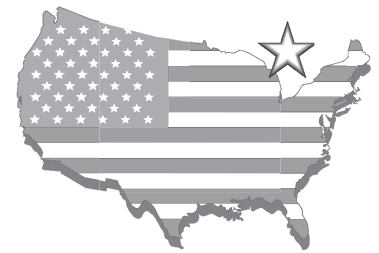


Tokyo, JAPAN

アメリカ留学自己変革記 (3)

早稲田大学政治経済学部 4年

宇野 真弘



Wisconsin, U.S.A.

2008年9月から2009年6月まで、大学の交換留学プログラムを利用して、ウィスコンシン州のローレンス大学に留学しています。この留学の目的は「自己変革」を起こすことです。その体験を記していきます。

こんにちは。私の通うローレンスでは、ついに秋学期が終わりました。今学期は、アメリカの大学での勉強に刺激を受けるとともに、楽しみにしていたアメリカ大統領選挙では、オバマキャンペーンのボランティアに取り組みました。前回は力を入れているクラスについて書いたのですが、今回は大統領選への私の取り組みについて書こうと思います。

選挙にどう関わるか

私の中では、この選挙にたいして自分がどうかかわるかが大きな問題でした。選挙キャンペーンのボランティアをするのか、選挙にかかわらず外から観察するのか。なぜなら、キャンペーンのボランティアをした場合、ニュートラルな視点から選挙戦を見ることが難しいと考えたからです。もちろん、自分の中に政策的な好みはすでにありました。けれども、それを排し双方の政策を客観的に判断しながら選挙を分析したいと思ったのです。

そこで、私はまずキャンパス内で活動するクラブ、カレッジデモクラットとカレッジリパブリカンズのミーティングに出席しました。そして、双方のキャンペーン活動を通じてメンバーと議論しながら、どちらで活動するかを決めようと考えたのです。どちらの会議でも、ダウンタウンにあるキャンペーンオフィスと協力することを確認していました。そのため、学外でのボランティアがたやすくでき、かつ学生以外のサポーターとも協力できるのです。

しかし、双方のミーティングに出たあと振り返ってみて、自分の中にどうも納得できないしこりがあることに気がつきました。アメリカだけでなく、日本と世界の未来に影響を与えるであろうこの選挙戦で、自分が同意できない候補者をサポートするのか。自分のサポートがこの選挙戦においてほんの小さな意味しか持ち得ないことはわかっていました。ですが、それでも自分が反対する政策を唱える候補者をサポートして、その政策の実現に少しでも貢献することが、本当に自分がしたいことなのか。そういったことについて悩みました。

私の出した結論は、民主党サイドでボランティアしながらも、確固たる客観的な視点を持ち続けるというものです。というのも、候補者の議論を分析するにあたって必要なことは、彼らの政策の根拠づけに目を向けることだと考えたからです。彼らがなぜその政策が必要だと主張するのか。彼らの理由付けは、矛盾することなく筋が通っているか。彼らの現状理解が正しいか、どのようにしてそのような理解にいたったのか。そうしたことを分析することで、現在世界が抱えている問題を解決するのにどちらの候補者の政策が適切かを判断できると思ったのです。

この過程を経るためには、客観的に彼らの根拠付けが妥当かを判断する目が必要です。それは、双方の候補者の理由付けだけでなく、双方のサポーターの考えも聞き、議論することで政策への理解が深まるのではないかと思います。というのも、民主党サポーターの中でしか議論しなかったら、共和党サイドからの視点を偏りなく分析することが困難になる可能性があるからです。

そうして、このような過程を経て客観的な視点をもっていれば、民主党をサポートしようが共和党をサポートしようが問題ではないと考えました。なぜなら、民主党サポーターに囲まれてボランティアしていても、上記のような努力によって自分の視点をニュートラルにたもつことができると思ったためです。このようにして、民主党サイドでボランティアすることに決めました。

